

仮定を表す Si 節における過去時制記号素

川 島 浩 一 郎*

0. はじめに

仮定を表し、かつ半過去記号素の実現形と同形の実現形を含む Si 節は、それをどのような時間領域に位置づけるのかによって解釈が異なる。たとえば過去時間に位置づけられた (1) の *s'il ne pouvait pas aller vers la vérité* は、過去時間における仮定を表現する。現在時間に位置づけられた (2) の *si j'étais toi* は (現在時間の事態に反する) 非現実の仮定を表現する。未来時間に位置づけられた (3) の *si je disais le contraire* は、実現の可能性が低い仮定を表現する。

(1) *La journée ne faisait que commencer. S'il ne pouvait pas aller vers la vérité, il attendrait que la vérité vienne à lui.* (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.327)

(2) *Si j'étais toi, [...], je changerais d'assistante.* (Nicole de Buron, *Chéri, tu m'écoutes ?... alors répète ce que je viens de dire...*, Collection Pocket, 1998, p.186)

(3) *Ben, je te mentirais si je disais le contraire.* (Philippe Djian, *37°2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.290)

仮定を表す Si 節に現れる半過去記号素の実現形と同形の切片は、表意単位

* 福岡大学人文学部教授

と実現形の対応関係という形態論的かつ統辞論的な論点を提起する。これらの切片は、Si 節の解釈にかかわらず、同一の表意単位の実現形なのだろうか。あるいは異なる表意単位の実現形なのだろうか。また、これらの切片を実現形とする表意単位は、半過去記号素と同一の表意単位なのだろうか。半過去記号素とは異なる表意単位なのだろうか。

仮定を表す Si 節に現れうる半過去記号素の実現形と同形の実現形は、すべて同一の過去時制記号素の実現形である。本稿では、このことを示す。時間領域的な位置づけ方によって仮定を表す Si 節の解釈が異なるのは、そこに過去時制記号素の実現形があるからにほかならない。過去時制記号素は、(1) の *s'il ne pouvait pas ...* のように過去時間に位置づけられた事態についてのみ、それが過去時間に位置づけられていることを標示する。一方 (2) の *si j'étais toi* や (3) の *si je disais ...* にモダリティ的な解釈が生じるのは、過去時制記号素の実現形を含む Si 節を現在時間や未来時間に位置づけるからだと考えざるえない。

1. 事実と概念、用語の確認

1.1 表意単位とその実現形

1.1.1 表意単位と実現形の非一対一対応

表意単位と実現形の間に一対一の対応関係はない。男女差、年齢差、地域差、個人差、声の大きさ強さ高さ、話す速さなど、音声面で観察できるあらゆる違いを考慮に入れば、同一の表意単位の実現形は無数に見いだすことができる。異音同義や同音異義も少なくない。たとえば (4) の *vous avez* [vuzave] と (5) の *vous* [vu] および *avez* [ave] のように、同じ表意単位が異なる実現形をもつことがある (後者には [z] がない)。また (6) の *montre* と (7) の *montre* のように、異なる表意単位が (音声的な微細な違いを除けば) 同じ実現形をもつことも珍しくはない。

- (4) *Vous avez tué un type que vous ne connaissez même pas, [...].*
(Brigitte Aubert, *Rapports brefs et étranges avec l'ombre d'un ange*,
Collection J'ai lu, 2002, p.29)
- (5) *En vous taisant vous l'avez tué.* (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et
de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.89)
- (6) *Elle regarda sa montre.* (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection
Pocket, 2002, p.455)
- (7) *Montre-toi à la lumière que je te vois.* (Marc Levy, *Le premier jour*,
Collection Pocket, 2009, p.214)

したがって、発話の切片が複数、任意に与えられたとき、それらが同一の表意単位の実現形であるのか異なる表意単位の実現形であるのかを判定するためには、実現形の「かたち」以外の基準が必要である (1.1.3を参照)。その基準なしには (4) の *vous avez* と (5) の *vous* および *avez* を異なる表意単位の実現形とすることも、(6) の *montre* と (7) の *montre* を同一の表意単位の実現形とすることも、無根拠にできてしまいかねない。つまり表意単位と実現形の対応を検討するための客観的な基準がなくなってしまう。

1.1.2 表意単位の実現形であることの必要条件

発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、少なくとも次の2条件がみたされることが必要である。条件 (a) 発話の一部分において、その切片を他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。条件 (b) この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。知的意味という用語は、大略、言語共同体において共有される客観的、離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。たとえば、(8) と (9) では *huit* と *neuf* を入れ換えることができる。つまり *huit* と *neuf* が条件 (a) をみたす。また *huit* と *neuf* の入れ換えによって、(8) や (9) の意味に客観的、離散的な弁別が生じる。

つまり huit と neuf が条件 (b) をみたす。したがって huit と neuf はそれぞれ、(8) や (9) において、表意単位の実現形として認定されるための必要条件をみたしていると考えてよい。

(8) Elle a *vingt-huit* ans. (Serge Brussolo, *La fenêtre jaune*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.19)

(9) Elle a *vingt-neuf* ans. (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.170)

(10) Elle a *huit* ans. (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.198)

最小の表意単位は、記号素と呼ばれる。記号素は、それ以上小さな表意単位に分節することができない表意単位である。つまり記号素の実現形の内部において上記の基準をみたす切片は、その記号素の実現形の全体しかない。たとえば (10) の huit の内部にあつて条件 (a) と条件 (b) をみたす切片は、この huit の全体だけである。よつて (10) の huit は記号素 (最小の表意単位) の実現形としての必要条件をみたすと言つてよい。

入れ換えの可能性が検証の対象となる切片には、いわゆる「ゼロ切片」も含まれる。ゼロ切片という用語は、切片が不在の状態を指す。たとえば (10) にみられるように、(8) の *vingt* はゼロ切片と入れ換えることができる。また、この入れ換えによつて (8) に知的意味にもとづいた弁別が生じる。この観察にもとづいて、(8) の *vingt* は表意単位の実現形としての必要条件をみたしていると考えてよい。

条件 (a) と条件 (b) に依拠しないかぎり、発話の任意の切片が表意単位の実現形であるのかそうでないのかを明確に判定する手段はない。条件 (a) に反して、かりに (8) の *vingt* も huit も (ゼロ切片も含めて) 他の切片との入れ換えができないと仮定しよう。この仮定は、(8) の *vingt* と huit が一体化して分離不可能であることを意味する。つまり *vingt* も huit も記号素 (最小の

表意単位) の実現形の一部に過ぎないことになる。また条件 (b) に反し、(8) の huit を他の切片と入れ換えることはできるが、この入れ換えによって (8) に知的意味にもとづいた弁別は生じないと仮定しよう。この仮定のもとでの huit を、表意単位の実現形と言うことはできない。どのような実現形を用いても (たとえば huit であろうが neuf であろうが sept であろうが) 発話に知的意味にもとづいた弁別が生じない文脈がもしあるとすれば、それは表意機能が働かえない文脈であると考えざるをえない。

1.1.3 異なる表意単位の実現形であることの認定基準

発話に現れる表意単位の複数の実現形 (X, Y と記号化する) を異なる表意単位の実現形であると判定するためには、当該の発話において次の 2 条件がみたされればよい。条件 (c) X, Y を入れ換えることができる。条件 (d) X, Y の入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。たとえば (11) の migraine と (12) の nausée は互いに入れ換えることができる。つまり migraine と nausée は j'ai la ... という文脈において条件 (c) をみたく。また migraine と nausée の入れ換えは (11) や (12) に、知的意味にもとづいた弁別を生じさせる。つまり migraine と nausée は j'ai la ... という文脈において、条件 (d) をみたく。したがって (11) の migraine と (12) の nausée は、当該文脈において、異なる表意単位の実現形であるとみなしてよい。

(11) [...], j'ai la *migraine*... (Cécile Krug, *Demain matin si tout va bien*, Collection J'ai lu, 2004, p.192)

(12) J'ai la *nausée*. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.60)

(13) *Asseyez-vous*, je vous en prie... (Andrea H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.233)

(14) *Assoyez-vous*... (Anna Gavaldà, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai

lu, 2004, p.407)

X, Yが条件 (c) をみたすが条件 (d) はみたさない文脈において, XとYは同一の表意単位の実現形である. たとえば (13) や (14) のような *asseyez* と *assoyez* を入れ換えても発話に知的意味にもとづいた弁別が生じない文脈にあっては, *asseyez* と *assoyez* を同じ表意単位の実現形であると考えざるをえない. これらの実現形は異音同義の関係にある (1.1.1を参照).

X, Yが条件 (c) をみたさない文脈においては, XとYを異なる表意単位の実現形であると言うことができない. ある文脈でXとYを入れ換えることができるためには, その文脈にX, Yの両方が現れうることが必要である. X, Yのどちらも現れえない文脈では, XとYの同一性や非同一性ははじめから問題とならない. 存在しないXを存在しないYと比較しても意味がないからである. またX, Yのうち的一方だけしか現れえない文脈においても, XとYの同一性や非同一性は問題となりえない. このような文脈には, 比較対象となるX(あるいはY)が存在しないからである. 文脈の一部分で互に入れ換えることのできない実現形, たとえば *le magasin* の *le* と *une boutique* の *une* について, それらを異なる表意単位の実現形であると言うためには, 特定の文脈を離れてメタ言語的な視点にたつ必要がある.

1.2 過去時制記号素とその実現形について

1.2.1 時制記号素の表意機能について

時制記号素は, 事態を特定の時間領域に位置づけるための表意単位である. たとえば過去時制記号素は, 事態を過去時間に位置づける. 現在時制記号素は, 事態を現在時間に位置づける. 同じく未来時制記号素は, 事態を未来時間に位置づける. 時制記号素の間の弁別は, それぞれの時制記号素が事態をどのような時間領域に位置づけるかの弁別である.

ある時間領域に位置づけられた事態がその時間領域に位置づけられていること

を積極的に標示できるのは、時制記号素のうち、特定の時制記号素だけである。たとえば過去時間に位置づけられた事態が過去時間に位置づけられていることを積極的に標示できるのは、時制記号素のなかでは、過去時制記号素だけである。現在時制記号素や未来時制記号素は、その事態が過去時間に位置づけられていることを積極的に標示できない。仮にそれが可能であるとすれば、時制記号素の間の弁別は、それぞれの時制記号素がどのような時間領域に事態を位置づけるかの弁別ではないことになってしまう。

したがって時制記号素は、特定の時間領域に位置づけられた事態についてのみ、それが特定の時間領域に位置づけられていることを標示する。たとえば過去時制記号素は、過去時間に位置づけられた事態についてのみ、それが過去時間に位置づけられていることを標示する。現在時制記号素は、現在時間に位置づけられた事態についてのみ、それが現在時間に位置づけられていることを標示する。同様に未来時制記号素は、未来時間に位置づけられた事態についてのみ、それが未来時間に位置づけられていることを標示する。

1.2.2 無標の過去時制記号素である半過去記号素

半過去の動詞形には、半過去記号素の実現形が含まれる。(15) の *est* と (16) の *était* を比べれば、前者 (*est*) にはない表意単位の実現形が後者 (*était*) に含まれていることは明らかである。半過去の動詞形を特徴づけるこの切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたく (1.1.2 を参照)。つまり、半過去形を特徴づける切片は、(15) の *est* にみられるように、他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。また、その入れ換えによって知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。それが半過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

(15) Le patron *est* un ami. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.20)

(16) Le patron *était* un ami, [...]. (Thierry Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.214)

半過去記号素は、過去時制記号素である。この記号素は、事態を過去時間に位置づけるための表意単位である (1.2.1 を参照)。たとえば、半過去記号素の実現形を含む (16) の *était* という動詞形は、この発話が表す事態が過去時間に位置づけられていることを積極的に標示している。

半過去記号素は、無標の過去時制記号素でもある。たとえば (15) の *le patron est ...* は「現在時間の友人関係」を表している。一方、半過去記号素の実現形を用いた (16) の *le patron était ...* は「過去時間の友人関係」を表現したものである。(15) の *le patron est ...* と (16) の *le patron était ...* の表意機能的な相違は、事態が位置づけられる時間領域が現在時間であるのか過去時間であるかの弁別にしかない。(16) における半過去記号素の実現形の存在意義は、動詞記号素を含む発話が表す事態を過去時間に位置づけることであって、それ以上でも以下でもない¹。

2. 仮定を表す Si 節における過去時制記号素

2.1 時間領域への位置づけによる仮定を表す Si 節の解釈の相違

2.1.1 過去時間に位置づけられた仮定を表す Si 節の解釈

仮定を表す Si 節が過去時間に位置づけられるとき、その Si 節に半過去記号素の実現形と同じ形の実現形が現れることがある。たとえば、仮定を表現する (17) の *s'il était ...* や (18) の *s'il le pouvait* は過去時間に位置づけられている。これらの *était* や *pouvait* には、半過去記号素の実現形と同形の切片が含まれる (1.2.2 を参照)。この切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.1.2 を参照)。ただし、この切片が過去時制記号素の実現形であるのかそう

¹ 半過去記号素が無標の過去時制記号素であることについては、参考文献として示した渡瀬、川島の諸論文を参照。

でないのかについては、客観的な検証が必要である。表意単位とその実現形は、一対一に対応しないからである（1.1.1を参照）。この検証がなされないかぎり、(17) の *s'il était ...* や (18) の *s'il le pouvait* に半過去記号素の実現形が含まれると言うことはできない（2.3を参照）。

(17) Il aurait aimé se coucher, mais il n'osait pas car *s'il était vraiment malade*, on l'emmènerait à l'hôpital. (Georges Simenon, *Le Petit Saint*, Collection Le Livre de Poche, 1964, p.36)

(18) [...] : il désirait profondément cette femme et, *s'il le pouvait*, il ne la quitterait jamais. (Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.55)

以上のような Si 節は「過去時間における仮定」を表現することができる。たとえば (17) の *s'il était vraiment malade* や (18) の *s'il le pouvait* は、過去時間に設定された仮定として解釈してよい。(17) における *il était vraiment malade* や (18) における *il le pouvait* という仮定は、現実の事態に合致している可能性もあれば、そうでない可能性もある。

2.1.2 現在時間に位置づけられた仮定を表す Si 節の解釈

仮定を表す Si 節が現在時間に位置づけられるとき、その Si 節に半過去記号素の実現形と同じ形の実現形が現れることがある。たとえば、仮定を表現する (19) や (20) の *si j'étais ...* はいずれも、現在時間に位置づけられている。これらの *étais* には、半過去記号素の実現形と同形の切片が含まれる（1.2.2を参照）。この切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたく（1.1.2を参照）。ただし、この切片が過去時制記号素の実現形であるのかそうでないのかについては、客観的な検証が必要である。表意単位とその実現形は、一対一に対応しない（1.1.1を参照）。この検証がなされないかぎり、(19) や (20) の *si j'étais ...* に半過去記号素の実現形が含まれると言うことはできない（2.3

を参照).

(19) *Si j'étais vous*, j'irais faire un petit tour au spa. (Guillaume Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.238)

(20) *Si j'étais Brigitte Bardot*, peut-être que je serais pas féministe !
(Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.23)

以上のような Si 節は「非現実の仮定」を表現することができる。たとえば (19) の *si j'étais vous* や (20) の *si j'étais Brigitte Bardot* は (現在時間に位置づけられた事態に反する) 非現実的な仮定として解釈してよい²。実際 (19) における *j'étais vous* や (20) における *j'étais Brigitte Bardot* という仮定は、現実の事態に合致する可能性がない。

2.1.3 未来時間に位置づけられた仮定を表す Si 節の解釈

仮定を表す Si 節が未来時間に位置づけられるとき、その Si 節に半過去記号素の実現形と同じ形の実現形が現れることがある。たとえば、仮定を表現する (21) の *si tu devenais ...* や (22) の *s'il t'arrivait ...* は未来時間に位置づけられている。これらの *devenais* や *arrivait* には、半過去記号素の実現形と同形の切片が含まれる (1.2.2 を参照)。この切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたく (1.1.2 を参照)。ただし、この切片が過去時制記号素の実現形であるのかそうでないのかについては、客観的な検証が必要である。表意単位とその実現形は、一対一に対応しないからである (1.1.1 を参照)。この検証がなされないかぎり、(21) の *si tu devenais ...* や (22) の *s'il t'arrivait ...* に半過去記号素の実現形が含まれると言うことはできない (2.3 を参照)。

(21) [...], *si tu devenais maire du village plus tard*, ça te plairait ? (Marc

² 川島 (2012b) や川島 (2013) で示したように、過去時制記号素そのものが事態の非現実性を表現するわけではない。

Levy, *Le voleur d'ombres*, Collection Pocket, 2010, p.64)

- (22) *Même s'il t'arrivait quelque chose, je ne pourrais rien faire. Je suis en Allemagne.* (Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.38)

以上のような Si 節は「実現の可能性が低い仮定」を表現することができる。たとえば (21) の *si tu devenais ...* や (22) の *s'il t'arrivait ...* は、未来時間に位置づけられた、実現の可能性が低い仮定として解釈してよい。実際 (21) における *tu devenais ...* や (22) における *il t'arrivait ...* という仮定は、現実の事態に合致する可能性が低い仮定として提示されている。

2.1.4 仮定を表す Si 節における表意単位と実現形の対応関係

半過去記号素の実現形と同形の切片を含み、かつ仮定を表す Si 節は、その Si 節をどのような時間領域に位置づけるのかによって解釈が異なる。たとえば、過去時間に位置づけられた (23) の *si la jeune femme s'approchait* は、過去時間における仮定を表現する (2.1.1 を参照)。現在時間に位置づけられた (24) の *si j'étais vous* は、非現実の仮定を表現する (2.1.2 を参照)。未来時間に位置づけられた (25) の *si je te quittais* は、実現の可能性が低い仮定を表現する (2.1.3 を参照)。

- (23) *Déterminé, il alla vers l'escalier à pas feutrés. De là, si la jeune femme s'approchait, il ne pourrait pas la manquer.* (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.142)

- (24) *Si j'étais vous, je ne perdrais pas de temps [...].* (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.355)

- (25) *Si je te quittais, tu n'aurais pas une larme.* (Nicole de Buron, *Qui c'est, ce garçon ?*, Collection J'ai lu, 1985, p.106)

仮定を表す Si 節に現れうる半過去記号素と同形の実現形について、それら

が同一の表意単位の実現形であると言うためには、何らかの客観的な検証が必要である。表意単位とその実現形は、一対一に対応しないからである (1.1.1を参照)。また (23), (24), (25) にみられるように、Si 節の解釈も常に同一であるとは言えない。(23) の *si la jeune femme s'approchait*, (24) の *si j'étais vous*, (25) の *si je te quittais* に含まれる半過去記号素と同じ形の切片を同一の表意単位の実現形であると言うためには、実現形の「かたち」以外の基準が必要となる (1.1.3 と 2.2 を参照)。

2.2 異なる表意単位の実現形と言うことのできない切片

仮定を表す Si 節には、半過去記号素の実現形と同形の実現形が現れることがある。たとえば (26) の *s'il rentrait ...*, (27) の *si j'étais vous*, (28) の *si maman se remariait ...* にはそれぞれ、半過去記号素の実現形と同じ形の切片が含まれる (1.2.2 と 2.1 を参照)。ただし、これらの Si 節の間には時間領域への位置づけ方に相違がある。

(26) Il avait envie d'autre chose. *S'il rentrait maintenant chez lui*, il allumerait la télé pour se détendre, mangerait devant sans la quitter des yeux avant d'aller se coucher, et il se réveillerait en pleine nuit pour l'éteindre. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.315)

(27) Et *si j'étais vous*, je ne serais pas aussi sûre de moi. (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.127)

(28) Tu serais contente, toi, *si maman se remariait avec lui* ? (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.139)

仮定を表す Si 節をどのような時間領域に位置づけるのかに相違があるとき、それらの Si 節に現れる半過去記号素の実現形と同形の切片を、互いに入れ換

えることはできない。たとえば (26) の *s'il rentrait ...*, (27) の *si j'étais vous*, (28) の *si maman se remariait ...*に含まれる半過去記号素の実現形と同じ形の切片は、互いに入れ換えることができない。これらの切片の間に弁別があるとすれば、それは Si 節に対する時間領域的な位置づけの弁別にしか根拠がない。これらの切片の間に弁別を認め互いに入れ換えようとするれば、時間領域的な位置づけ方も連動して入れ換わってしまうことになる。つまり、半過去記号素の実現形と同形の実現形だけを入れ換えたことにはならないのである。

したがって、仮定を表す Si 節をどのような時間領域に位置づけるのかに相違があるとき、それらの Si 節に現れる半過去記号素と同形の実現形については、それらを異なる表意単位の実現形と言うことができない。少なくとも当該文脈においては、それらを入れ換えることができないからである (1.1.3 を参照)。よって (26) の *s'il rentrait ...*, (27) の *si j'étais vous*, (28) の *si maman se remariait ...*に含まれる半過去記号素の実現形と同じ形の切片を、異なる表意単位の実現形として認定することはできないことになる。なお、これらの実現形の間に仮に入れ換えが成立したとしても、発話に知的意味にもとづいた弁別が生じるわけではない (1.1.3 を参照)。

以上より、仮定を表す Si 節に現れる半過去記号素と同形の実現形については、それらを同一の表意単位の実現形とみなしてよいことになる。ある文脈において異なる表意単位の実現形だと言えない複数の同形の実現形は、当該文脈においてそれらを同一の表意単位の実現形とみなしても、少なくとも不都合は生じない。もし不都合が生じるのであれば、それらは異なる表意単位の実現形と言えることになってしまう。つまり矛盾が生じる。

2.3 仮定を表す Si 節における過去時制記号素の実現形

仮定を表す Si 節に半過去記号素の実現形と同形の実現形が含まれるとき、その Si 節の解釈は、それをどのような時間領域に位置づけるのかによって異なる

る。たとえば、過去時間に位置づけられた (29) の *s'il n'était pas là* は、過去時間における仮定を表現する (2.1.1 を参照)。現在時間に位置づけられた (30) の *si j'étais vous* は、現在時間の事態に反する非現実の仮定を表現する (2.1.2 を参照)。未来時間に位置づけられた (31) の *si tu la voyais plus, maman* は、実現の可能性が低い仮定を表現する (2.1.3 を参照)。仮定を表す、半過去記号素の実現形と同形の切片を含む Si 節の解釈は、その Si 節をどの時間領域に位置づけるのかに影響を受ける。

(29) Pour l'heure, il fallait s'assurer que le tueur était chez lui. *S'il n'était pas là*, il faudrait se cacher et attendre son retour, [...]. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.562)

(30) [...], *si j'étais vous* je ne jetterais pas l'éponge toute de suite. (Tonino Benacquista, *Tout à l'ego*, Collection Folio, 1999, p.101)

(31) Mais, Papa, tu serais triste *si tu la voyais plus*, maman, dis ? (Alix Girod-de l'Ain, *De l'autre côté du lit*, Collection J'ai lu, 2003, p.240)

この観察は、仮定を表す Si 節に含まれる半過去記号素の実現形と同形の実現形が、時制記号素の実現形であることを暗示する。時間領域的な位置づけ方の相違が解釈に影響を与えるのは、そこに何か時間領域的な位置づけに関する表意機能があるからにほかならない。事態を特定の時間領域に位置づけるための表意単位は、時制記号素と呼ばれる (1.2.1 を参照)。

仮定を表す Si 節が過去時間に位置づけられるとき、その Si 節に含まれる半過去記号素の実現形と同形の実現形は、過去時制記号素の実現形である。過去時間に位置づけられた事態が過去時間に位置づけられていることを標示できるのは、時制記号素のなかでは、過去時制記号素だけだからである (1.2.1 を参照)。たとえば (29) の *s'il n'était pas là* に含まれる半過去記号素の実現形と同形の実現形は、過去時制記号素の実現形と考えてよい。実際 *est* という動詞形を用いた *s'il n'est pas là* と (29) の *s'il n'était pas là* の間にある表意機能的な

相違は、これらの事態を位置づける時間領域が現在時間であるのか過去時間であるかの弁別にしかない。(29) の *s'il n'était pas là* における半過去記号素の実現形と同形の実現形の存在意義は、事態を過去時間に位置づけることであって、それ以上でも以下でもない (1.2.2 を参照)。

したがって、仮定を表す Si 節が現在時間や未来時間に位置づけられるときも、その Si 節に含まれる半過去記号素の実現形と同形の実現形は、過去時制記号素の実現形であるとみなしてよい。仮定を表す Si 節に現れる半過去記号素と同形の実現形については、それらを同一の表意単位の実現形とみなしてよいからである (2.2 を参照)。つまり (30) の *si j'étais vous* や (31) の *si tu la voyais plus, maman* に含まれる半過去記号素の実現形と同形の実現形は、(29) の *s'il n'était pas là* の場合と同様、過去時制記号素の実現形と考えるとよい。実際、現在時間に位置づけられた (30) の Si 節や未来時間に位置づけられた (31) の Si 節にあっては、過去時制記号素によって、事態が過去時間に位置づけられていることを標示できない。過去時制記号素は、過去時間に位置づけられた事態についてのみ、それが過去時間に位置づけられていることを標示するからである (1.2.1 を参照)。なお川島 (2015b) で示したように、仮定を表す Si 節に現れる過去時制記号素は半過去記号素ではなく、原過去時制記号素（単純過去記号素と半過去記号素の機能的共通部分）だと考えられる³。

3. まとめ

仮定を表す Si 節に半過去記号素の実現形と同形の切片が現れるとき、その切片はいずれも同一の表意単位の実現形である。この切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみताす。たとえば (32) の *s'il avait une pensée intéres-*

³ 川島 (2015b) で示したように、原過去時制記号素は単純過去記号素と半過去記号素の対立の外側にある無標の過去時制記号素である。一方、半過去記号素は単純過去記号素との対立を含意した無標の過去時制記号素である (1.2.2 を参照)。

sante や (33) の *si j'étais vous*, (34) の *si je te disais ...*に含まれる半過去記号素の実現形と同形の切片は、どれも同一の表意単位の実現形である。

(32) [...], il acheta un carnet qu'on pouvait glisser dans la poche arrière de son pantalon. De sorte que *s'il avait une pensée intéressante*, il pourrait la noter. (Fred Vargas, *L'homme aux cercles bleus*, Collection J'ai lu, 1996, p.97)

(33) *Si j'étais vous*, je ne ferais pas ça. (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.288)

(34) [...], je te mentirais *si je te disais que tu ne me manqueras pas*. (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.191)

仮定を表す Si 節に現れる半過去記号素の実現形と同形の切片は、すべて過去時制記号素の実現形である。つまり (32) の *s'il avait une pensée intéressante*, (33) の *si j'étais vous*, (34) の *si je te disais ...*に含まれる半過去記号素の実現形と同形の切片は、過去時制記号素の実現形と言ってよい。(32) の *s'il avait une pensée intéressante* におけるように、過去時間に位置づけられた事態が過去時間に位置づけられていることを積極的に標示できるのは、時制記号素のなかでは過去時制記号素だけである。なお川島 (2015b) で示したように、仮定を表す Si 節に現れる過去時制記号素は半過去記号素ではなく、原過去時制記号素 (単純過去記号素と半過去記号素の機能的共通部分) だと考えられる。

過去時制記号素の実現形を含み、かつ仮定を表す Si 節の解釈は、その Si 節をどのような時間領域に位置づけるのかによって異なる。たとえば、過去時間に位置づけられた (32) の *s'il avait une pensée intéressante* は、過去時間における仮定を表現する。他方、現在時間に位置づけられた (33) の *si j'étais vous* は (現在時間の事態に反する) 非現実の仮定を表現する。また未来時間に位置づけられた (34) の *si je te disais ...*は、実現の可能性が低い仮定を表現する。このように仮定を表す Si 節の解釈が時間領域的な位置づけによって異なるの

は、そこに過去時制記号素があるからにはほかならない。過去時制記号素は、(32) の *s'il avait ...* のように過去時間に位置づけられた事態についてのみ、それが過去時間に位置づけられていることを標示する。(33) の *si j'étais vous* や (34) の *si je te disais ...* にモダリティ的な解釈が生じるのは、過去時制記号素の実現形を含む Si 節を現在時間や未来時間に位置づけるからだと考えざるをえない。

参考文献

- 川島浩一郎 (2006) 「フランス語の複合過去と半過去に関する一考察 — 時制とアスペクトの間接的対立 —」『福岡大学研究部論集』A6-3, 37-61.
- 川島浩一郎 (2012a) 「半過去と未完了解釈 — 完了か未完了かの弁別を含まない過去時制 —」『福岡大学人文論叢』43-4, 817-833.
- 川島浩一郎 (2012b) 「過去時制と非現実解釈」『ふらんばー』37, 東京外国語大学フランス語研究室, 17-35.
- 川島浩一郎 (2012c) 「時間的な対比を表す半過去について」『福岡大学研究部論集』A12-2, 9-13.
- 川島浩一郎 (2013) 「半過去と非現実の帰結 — 間一髪の半過去をめぐって —」『福岡大学研究部論集』A13-1, 25-31.
- 川島浩一郎 (2014a) 「単純未来, 近接未来, 近接過去との共起における半過去と単純過去の対立の中和」『福岡大学人文論叢』45-4, 521-541.
- 川島浩一郎 (2014b) 「教科書における無標の過去時制: 半過去の教え方」『Rencontres』28, 関西フランス語教育研究会, 107-111.
- 川島浩一郎 (2015a) 「接続法半過去形および接続法大過去形における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和」『福岡大学人文論叢』46-4, 899-923.
- 川島浩一郎 (2015b) 「仮定を提示する Si 節における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — 半過去記号素と原過去時制記号素 —」『福岡大学人文論叢』47-2, 497-519.
- 川島浩一郎 (2015c) 「複合過去形と半過去形の選択にかかわるタスクデザイン — 時制

- 的弁別とアスペクト的弁別 —』『福岡大学人文論叢』47-3, 787-812.
- 川島浩一郎 (2016a) 「Pendant que 節における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和」『福岡大学研究部論集』A16-1, 33-40.
- 川島浩一郎 (2016b) 「無標の過去時制記号素：半過去形の教授方針」『Rencontres』30, 関西フランス語教育研究会, 74-78.
- 渡瀬嘉朗 (1985) 「動詞の「時」と「相」」『フランス語学の諸問題』三修社, 38-49.
- 渡瀬嘉朗 (1990) 「「未完了」特性について」『東京外国語大学論集』41, 23-38.
- 渡瀬嘉朗 (1994) 「Actuel と Inactuel —「現在」と「半過去」, 「大過去」—」『東京外国語大学論集』48, 43-58.
- 渡瀬嘉朗 (1995) 「時制の理論のために — 文意の分析と時制の対立 —」『東京外国語大学論集』50, 35-50.
- 渡瀬嘉朗 (1998) 「二つの過去形 — 意味の枠組みの明確な過去, 枠組みのない過去 —」『フランス語を考える フランス語学の諸問題 II』三修社, 8-21.
- 渡瀬嘉朗 (2012) 『統辞理論の周辺』三修社.
- 渡瀬嘉朗 (2013) 「時制とマルク」『フランス語をとらえる フランス語学の諸問題 IV』三修社, 10-16.